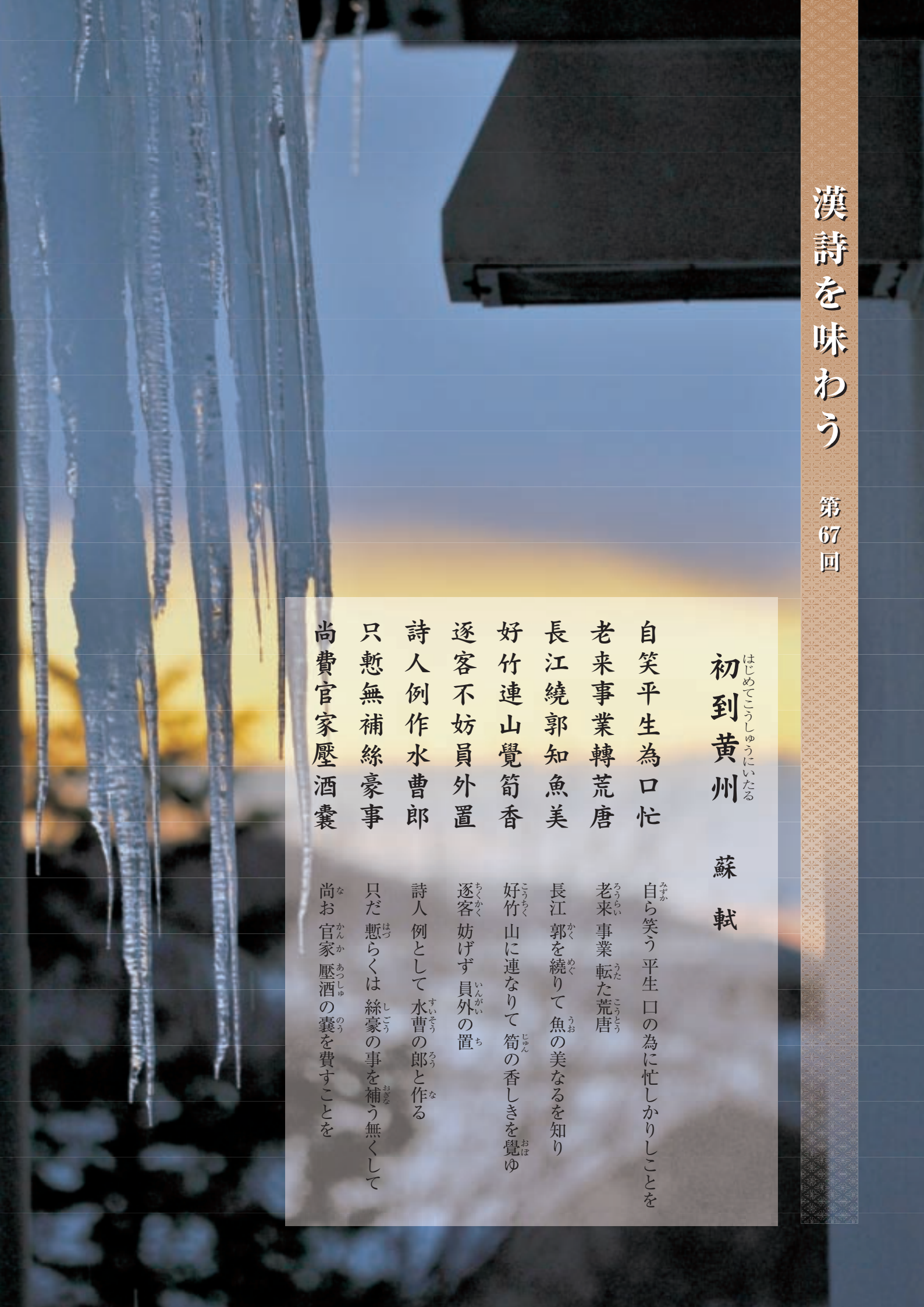


漢詩を味わう

第67回

初到黄州（はじめてこうしゅうにいたる）

蘇軾

自笑平生為口忙　自ら笑う平生口の為に忙しかりしことを
老来事業轉荒唐　老来事業転た荒唐
長江繞郭知魚美　長江郭を繞りて魚の美なるを知り
好竹連山覺筍香　好竹山に連なりて筍の香しきを覺ゆ
逐客不妨員外置　逐客妨げず員外の置
詩人例作水曹郎　詩人例として水曹の郎と作る
只慙無補絲豪事　只だ慙らくは絲豪の事を補う無くして
尚費官家壓酒囊　尚お官家壓酒の嚢を費すことを

これまでの生涯が、もの申すのにばかり忙しく明け暮れてきたことを、今振り返ると我ながらおかしい。年老いるにつれて、どうも私のすることはだんだん見当がずれてきているようだ。

ここ黄州は長江が城壁をとりまくように流れているので、きっとおいしい魚が食べられるだろうし、まわりの山々には素晴らしい竹藪が広がっていて、なんだか筍のよい香りが漂っているような気がする。

放逐の身であるわたくしに、員外という職分はちょうどじゃまにもならなくて構わない。それにどうも昔から、詩人は水部の職につくためしになっているようだ。

ただ、お恥ずかしく思うのは、天子様の政治に何の用にもたたぬ身にまで、なおも、おかみから現物給与のかたちで手当てが送られてくることだ。

《為口忙》 口（文学を含む）のために災いを得たこと。そして食を得るために忙しくすることと、両方にかけてある。

《転》 うたた。車輪の回転するようにますます深まってくること。

《員外置》 定員外の官。古くから局長格の下に員外郎が置かれ、蘇軾が任命されたのは単に名目上のこと。

《水曹郎》 水部郎の異称。天下の山川についての政令を掌るが、加官なので仕事をするわけではない。詩人でこれに任ぜられた例は梁の何遜や唐の張籍などがいる。

《無補絲豪》 絲豪は極めて小さい数量のことで、何の役にも立たないこと。

《壓酒囊》 本の注釈に「検校官は例として折支に多く退酒袋を得るなり」とあり、折支は現物支給することで、壓酒囊は酒を絞る袋で退は払い下げ品をいう。

北宋を代表する詩人蘇軾は二十二歳で進士に及第し、高級官僚としての途を歩んでいました。しかし、自らの信念を曲げることのなかった蘇軾は党派の争いに巻き込まれ、たびたび左遷されることになります。一〇七九年、蘇軾四十四歳のとき、弟の蘇轍に送った詩を朝廷誹謗と咎められ、御史台の獄中に、百日に亘って拘留されます。御史台とは高級官僚の勤務成績を調べて不良のものを弾劾することを任務とする役所です。弟蘇轍は自分の任を解かれても構わないとして蘇軾の情状酌量を願い出ます。一方で蘇軾は死を覚悟して弟に詩を寄せます。**「君と世々兄弟と為りて、又た来生未了の因を結ばん**――君とは幾たび生まれ変わろうと、いつも兄弟であり続けよう。この世では尽くせなかった因縁をまた来世で結ぼうではないか。」（予事を以て御史台の獄に繋がる……以て子由に送る） 神宗は獄吏を通じてこの詩に触れます。もともと蘇軾を殺す気はなかったようですが、ますます心を動かされて許すことを決意します。そして蘇東坡が、獄中から出たのは、その年も押し詰まった十二月二十八日でした。

翌年の二月一日、蘇東坡は流罪人として黄州に到着し、この「初到黄州」を詠んでいます。それからの黄州での生活は実に厳しいもので、三年後、書としても傑作とされる「黄州寒食詩」を残しています。この黄州での苦しい生活を見かねた友人は蘇軾に土地を都合して、耕作ができるように図らってくれました。この土地は黄州の東の小高いところにあったので、白楽天が左遷されたときに詠んだ詩にある「東坡」と名付け、それ以降自らを東坡居士と号しました。

蘇東坡はいかに困難な状況であっても、詩の中で一切恨み言を述べません。自らの来し方を反省し、川を見れば美味しい魚がいると思い、山に竹藪があれば筍を連想します。そして与えられた閑職を喜んで受け入れています。この「初めて黄州に到る」の詩の内容はまさにプラス思考で、考え方一つで自分の置かれた状況が良くも悪くもなることを私たちに教え、勇気を与えてくれます。詩から滲み出る誠実さ純粋さに感動させられます。

参考文献：集英社「漢詩選蘇軾」・岩波書店「中国詩人選集蘇軾」・岩波文庫「蘇東坡詩選」

竹林斜照上り　陋巷車轍無し　千里暮れに相思って　独り空庭の雪に対す

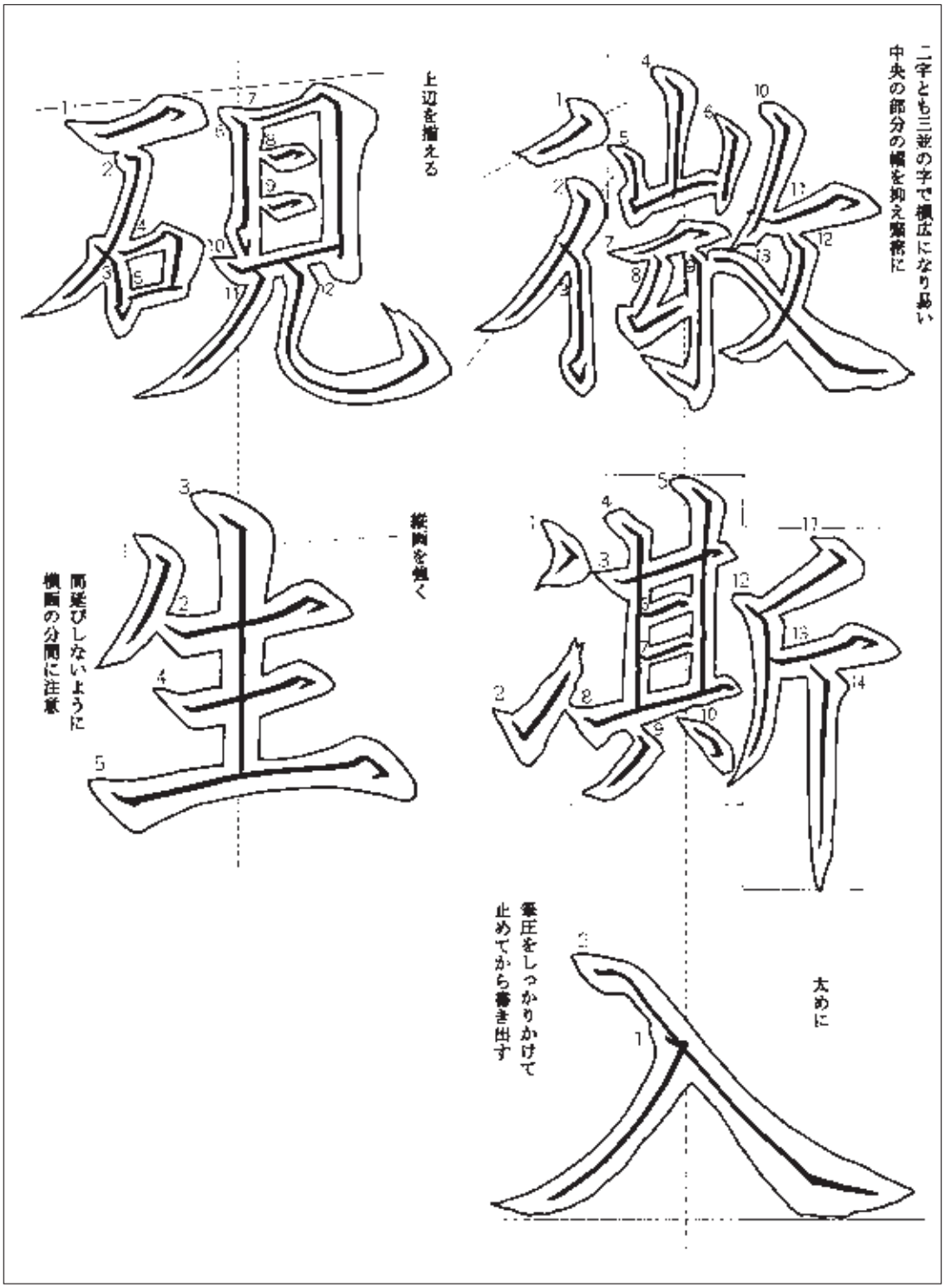
《大意》竹やぶに夕日が射し、狭い街には通る車もない。遠く離れている兄のことを思いながら、静かな庭の雪をひとり眺めている。（王魚洋詩・雪後家兄西樵を思う）

氷花晩に浄きを看　風葉天の寒きを識る

《大意》花のように美しい氷は夕暮れにひとしお清く結ばれ、風に散る木の葉に天の寒さを知らされる。（虞集）

読み　微漸硯（びしけん）に入って生ず（ざらざらと軽微の氷が硯池に生じた・陸龜蒙）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

隷　書

次号課題

江路野梅香ばし

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

ペン字部課題　（12月26日〆切）

細字部課題　（12月26日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

金生麗水玉出崑岡
金生麗水玉出崑岡
金生麗水玉出崑岡

佐藤象雲書

音　キンセイレイスイ　ギョクシュツコンコウ

略解　昔砂金は麗水という河から採れ水晶や琥珀などの玉は崑岡から産出した

墨の色霧降るなどに東京へ

悦みつつ如き師走となりぬ

和泉渓石先生書

支部　順位　氏名

典御十方

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書(21)

十方を典御するにおいてや……

象雲臨

『典御十方』

初唐の三大家の生卒を見てみると

欧陽詢　五五七～六四一

虞世南　五五八～六三八

褚遂良　五九六～六五八

褚遂良は欧虞より四十歳ほど若く、太宗の二歳年上ということになります。

褚遂良の父褚亮は太宗の臣下で欧陽詢と虞世南と同年代です。太宗が貴族の子弟の書道教育のため弘文館を設けたとき、褚亮も欧陽詢、虞世南とともに指導者のひとりでした。

褚遂良の書の修業時代は太宗の保護奨励のもと書の黄金時代で、非常に恵まれた環境にあったといえます。

この雁塔聖教序が書かれたのは褚遂良晩年の西暦六五三年です。父と欧虞は既に亡くなり太宗も没していましたが、高宗にも重用されて、初唐の楷書群の最後を飾るに相応しい華麗優美なこの雁塔聖教序を丹書しています。

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（3）

其の余は観るに足らず……

象雲臨

『其餘不足観』

草書は現在では、実用としてはほとんど使用されていないため、読めない方が殆どだと思います。そのため、草書体を覚える難しさを感じる方が多いのが現状です。草書学習に適したテキストとして「草訣百韻歌」という米芾が王羲之の字を集字して編纂したといわれる本があります。私も昔この本によって草書を勉強しましたが、楽しんで習った記憶がありません。その後、この書譜に出会って取り組むことになりますが、初心者の私でも非常に魅力的な古典に思えました。書譜は唐時代に書かれた真蹟本が存在し、書論としても優れたものであるということもあり、現在でも草書の重要古典として人気があります。

本欄では今後「草訣百韻歌」にはない魅力を持つ書譜の書法について掘り下げて勉強していきたいと思います。